

「信仰による繋がり——一六年ぶりにニューヘイブンを訪れて」



大学宗教主任  
高砂民宣  
TAKASAGO Tamoharu

神よ、変えることのできるものについて、それを変えるだけの勇気を我らに与えたまえ。

変えることのできないものについては、それを受け入れるだけの冷静さを与えたまえ。

そして、変えることのできるものと、変えることのできないものとを、識別する知恵を与えたまえ。

(大木英夫訳)

これは有名なニーバーの祈り(Serenity Prayer)である。この祈りの作者とされるラインホルド・ニーバーと、弟のH・リチャード・ニーバーは、共にイエール大学で神学を学んだ。他にもジョンナサン・エドワーズを始め、スタンリー・ハワー、ウイリアム・ウイリモン、リ

チャード・ヘイズなど、日本でも知られる多くの神学者・聖書学者たちがイエール大学から輩出されている。

アメリカの多くの大学がそうであるように、イエール大学も元来は牧師養成の機関として一七〇一年に建てられ、スタートした。現在は一二の全寮制カレッジと総合学術大学院および一二の専門職大学院を擁する総合大学に成長している。特にロー・スクール(法科大学院)はフオード元大統領やクリントン元大統領夫妻を輩出するなど、政界にも大きな貢献をしている。また、スクール・オブ・ドラマ演劇大学院からは、ポール・ニューマンやメル・ストリープといったハリウッドを代表する俳優たちが輩出されている。さらに、ブッシュ元大統領親子やジョン・ケリー

前国務長官は、カレッジの卒業生である。

最近、「都市伝説」という言葉をしばしば耳にするが、イエール大学にはスカル・アンド・ボーンズ(S&B)と呼ばれる秘密結社があるとされる。キャンパス内を歩くと、窓のない不思議な建物があることに気付くが、そこはS&Bの会員が集まって議論する場所と言われている。その秘密結社の目的は、会員が互いに協力し、社会的な成功を収めることであるという。二〇〇四年に行われたアメリカ大統領選挙の際、共和党のジョージ・W・ブッシュ氏は、民主党の候補者であったジョン・ケリー氏を、激戦の末に下して再選を果たした。この両者がいずれもS&Bの出身であったことは、知る人ぞ

知る話である。

それはさておき、ニューヘイブンにある広大なキャンパスには、ゴシック式の荘厳な校舎が建ち並び、そこにいると時間が止まったような気持ちになる。そしてニューイングランド地方の秋は、紅葉がとても美しく、筆舌に尽くしがたい(①)。

私は二〇一五年の九月半ばから一年間、アメリカ合衆国の東部コネチカット州ニューヘイブンにあるイエール大学神学大学院で、客員研究員(Visiting Fellow)として研究する機会を与えられた。以前は留学生として籍を置いたが、卒業してから数えると、一六年ぶりの再訪である。今回は客員研究員として滞在したが、この資格を得ると、図書館を始めとし、学内の施設を自由に利

用することができる。また、担当教授の許可を得れば、講義を聴講することもできる。私は久しぶりに大学の学生たちと肩を並べ、リフレッシュした気持ちで著名な学者たちの講義に耳を傾け、最新の聖書学や神学に触れることができた。また、イエール大学にはスターリング記念図書館を始め、幾つもの図書館があり、全体の蔵書数は一一〇〇万冊を

超えると言われる。神学大学院では、前学部長のハロルド・アットリッジ教授(②)を始め、学生時代にご指導くださった先生方も数人ご健在で、今回も大変お世話になった。在外研究の日々は、誠に貴重な時であった。詳しい内容について関心のある方は、宗教センターから三月に発行される青山学院大学宗教主任研究叢書『キリスト教と文化』第三二号をお読み頂ければ幸いである。

イエール大学神学大学院では授業期間中、青山学院大学と同様に、毎週月曜日から金曜日の午前一〇時半から一時まで、マーカンド・チャ



①キャンパス内の紅葉

ペル(③)で礼拝が行われる。特に金曜日には礼拝の中で聖餐式(④)が執行される。キャンパス内の寮に住んでいた私は、ほぼ毎日チャペルの礼拝に出席した。説教のメッセージに慰められ、励まされると共に生活のリズムを整える上でも有益であった。

アメリカの東部や西海岸に位置する多くの州がそうであるように、コネチカット州は「ブルー・ステイト」と呼ばれ、民主党支持者が多い州である。昨年の四月末、コネチカット州を含む五つの州で、大統領選挙の予備選が行われた。選挙の数日前に民主党のバーニー・サンダース氏がニューヘイブンを訪れ、演説を行った。若者たちから熱烈な支持を得ていると聞いていたが、会場となったニューヘイブン・グリーンには、確かに大勢の若年層が集まっていた。会場の入り口には移動式の保安検査場が設置され、まるで飛行機の搭乗前であるかのように、手荷物検査とボディチェックが厳重に行わ



②ハロルド・アットリッジ教授と

れた。会場を埋め尽くす大勢の観衆を見て、民主党の本命と目されるヒラリー・クリントン氏は、もしかして危ういのではないかと思った。しかし蓋を開けると、クリントンの勝利であった。この経験により、その年の秋に行われる大統領選挙では、民主党のクリントン氏が勝利すると確信していた。しかし結果は、共和党のトランプ氏の勝利であった。イギリスのEU離脱に続き、この結果には本当に驚かされた。

毎週日曜日には、神学大学院から歩いて一〇分ほどの所にあるファースト・プレスビテリアン・チャーチの礼拝に出席した。この教会は学生時代にも通った懐かしい場所である。卒業して帰国後しばらくは、数人の教会員の方々と文通をしていた。しかし私は筆無精で、当時はまだ電子メールを使用していなかったこともあり、いつしか音信が途絶えるようになっていた。今回、約一六年ぶりにファースト・プレスビテリアン・チャーチを訪れたが、当時からいる



③雪景色のマーカンド・チャペル

教会員の方々は私のことを覚えていてくださり、以前のように私のことを「タミー」と呼んで、温かく迎えてくださった。クリスマスカードすら出さなくなり、不義理をしていた私を、心温まるホスピタリティ精神をもって、再び受け入れてくださったのである。新約聖書に「放蕩息子」のたとえ(ルカによる福音書一五章一一〜三三節)が記されているが、私は何か自分が放蕩息子であるかのような思いを抱いた。遠い国に旅立ち、放蕩の限りを尽くして帰って来た息子を、父親は寛大な心で迎え入れる。このたとえの中で、父親は神を指しており、人間に対する神の大きな愛を示している。もちろん、私は日本に帰国後も、教会で礼拝を守っていたが、アメリカの教会にご無沙汰していたことは確かである。その不義理を赦し、再び迎え入れてくださった。信仰という一点で、国境を越えても繋がっていたことを覚え、喜びと感謝で胸が一杯になった。



④チャペルの礼拝での聖餐式